Tess of the D'Urbervilles を通して見た Thomas Hardy の特性

乙 間 雅 子

I

Thomas Hardy (1840—1928) は，ヴィクトリア朝 (1837—1901) の作家であるが，英文学史上においても十指にはいる代表的作家であり，二十世紀の現代においても多くの読者を持ち続けている。ここでまずその時代背景にふれてみたい。

イギリスは，十八世紀の後半に，他のヨーロッパ諸国に先んじて産業革命をむかえているが，これは工業のみならず，農業にも一大変革をもたらした。都会の資本家による新技術導入の大農的経営が行なわれ，小単位の農業は滅んでいった。技術の進歩と機械使用の為わずかの労力ですむようになり，農民の労働の場は失われていった。更に工業の発達により，それまで農民の副収入源だった手工業がすべて都会の工場生産の与る所となり，農民の多くは，貧民として工場に流れ込んだが，職を得られる者は僅かであった。農業全体から見れば産額は増加していったが，農民の窮乏は深まっていった。一方産業革命の結果，商工業階級という新興階級ができあがり十九世紀にはその世論が政治に反映され始めて，いわゆるブルジョワ支配の時代へと移っていく。労働者の生活の困難は解消されず，労働運動が続けられ，これは政治運動の上では Chartism Movement となっていった。農民労働者の貧困をよそに経済はめざましく発展し，科学もまた発達した。新興商工業階級は旧支配階級と経済的に対等になったが，彼等は門地とか教養を持たなかったので，それにかわるものとして自負の根拠をその道徳観に求めた。物質的な面に重きの

おかれた時代であったから，道徳も目に見える形で表されることが必要とされ，ついには誇張されて，一定の風俗に従ってさえいれば道徳的ということになり，体裁が重んじられ，それがそのままヴィクトリア朝の特色となった。十九世紀末には，ドイツ，アメリカなど後進の資本主義国に，旧態依然のイギリスは経済的におくれをとり始めた。このような経済状況の時発表された Darwin の『種の起源』(1872) は，画期的な反響を呼び，文芸思潮，社会哲学思想にまで大きな影響を与えた。このような十九世紀という時代は，まさに近代社会への過渡期であると言える。そしてその近代化への影響をもろに受け衰退の一途を辿ったのは，農村社会であった。この時代背景を念頭において，Hardy の小説を見なおしてみたい。

Hardy の作品において，必ず第一にあげられるのは Immanent Will という言葉によって代表される彼の運命観である。即ち，この宇宙は Immanent Will なる巨大な力に支配されていて，人間はそれに翻弄される無力な傀儡にすぎない。それなのに虚しい抗いを続け自らの悲劇を増しているという厭世的運命観である。Hardy の作品には，確かに共通して流れている運命観だが，これが第一に掲げられてしまう為に，他の要素が二の次にされ運命観のみとりあげる傾向が強すぎはしないだろうか。また Hardy が，それまでは Fate, First Cause などという言葉で表わしていたものに Immanent Will という言葉を用い，この運命観を表面に打ち出したのは，Napoleon 戦争を主題にした叙事詩劇 'Dynasts' (1904, '06 '08) に至ってであった。即ち Hardy の運命観は 'Dynasts' に至って確立したと言えるのであり，他の作品に初めから運命観をあてはめることには，無理があるのではないか。又この厭世的運命観は，Darwin の進化論から当然指摘できる観点——即ち「ある個体がどのような変異を持って生まれてくるかということ自体は，その個体の後天的な道徳的，知的努力とは無関係な，いわばその個体にとってまったく偶然的な宿命にすぎないとすれば，生物個体（人間を含めて）の生涯が常識や倫理というものの観点からは，冷酷で不合理きわまる条件に

左右されて滅び得るものと観念せざるを得なくなる。」[1]——を，そのまま受けたことになり，Darwinism の影響ということになれば，それは時代の独自性であって，Hardy の独自性ではないことになる。となると Hardy の運命観は，少なくとも小説においては，まず第一に掲げねばならないという必然性はないのではあるまいか。

時代背景と彼の長編小説の変化とをここでくらべてみたい。Hardy の長編小説は十四あるが，初期，中期，後期と大別できる。その流れを見ると，初期の "Under the Green wood Tree" (1872) "Far from the Madding Crowd" (1874) などでは，田園の美しさに終始し，実に明かるい。それが中期に至ると，"The Return of the Native" (1878), "The Mayor of Casterbridge" (1886) などを経て次第に悲劇感を増し，"Tess of the D'Urbervilles" (1891), "Jude the Obscure" (1896) に至っては救い難い悲劇となってくる。このように変化していく年代を見ると，それは農村衰退の歴史と符合する。Hardy は彼の愛した田園生活が，近代文明の発展により，次第に変動を余儀なくされ田園性がそこなわれていくのを，また，そこに居住する素朴な人間味豊かな人々の生活が滅んでゆくのを見つめていたのである。そしてそこにどうしようもない歴史の流れを認めていたが故に，悲劇感しか抱けなかったのではあるまいか。しかし Hardy が単に，滅びゆく田園社会への哀愁というようなものに拠ってのみその作品を描いているのだったら，Hardy の作品はこれほど長い生命を持ち得たろうか。二十世紀の現代になお，多くの読者の共感を呼び起こしているものは何か。私はそれを，主に後期の長編小説，"Tess of the D'Urbervilles" を通して，探ってみたい。

II

まず主人公の Tess の生涯を，順に辿ってみて，そこに示されている特性にふれてみたいと思う。

Tess が，初めて読者の前に登場するのは，Marlott の村の，The May-Day dance という，昔からの行事の名残りをとどめる club-walk-

ing における姿である。Marlott の美しい素朴な大自然の中で，Tess は，未だ子供の域を出ないあどけなさを見せている。そこに偶然通りかかって，村の娘と踊っていった，Emminster の牧師の息子 Angel Clare に，Tess は 'the flash of gentle sentiment'[(2)] を抱く。が，それはほんの束の間で，彼女は，'the yellow melancholly of this one-candled spectacle'[(3)] へと引き戻される。それは，Tess の家庭であり，酒飲みで労働意欲のない父親。単純無知な母親。十七才の Tess を頭に，七人の兄弟という，貧困と無知の典型のような一家である。そこに，牧師のほんの気まぐれと衝動から，名門の d'Urberville 家の末裔であると教えられる。すると，自分が勲爵士にでもなったかの如く思い込んでしまう父親。Trantridge の d'Urberville 家を親類と思い込み，Tess を送り込んで何とか良縁を結ばせたいと考え，それがすぐにでも実現することのように有頂天になる母親。この思いは，Tess の弟妹にも感染し，Tess には，いわば一家の期待がよせられる。更には，一家の貧困に追いうちをかけるような，たった一頭の持ち馬の死という不運。こうして Tess の上に貧困という重荷がのしかかり，ついに 'a mere vessel of emotion untinctured by experience'[(4)] にすぎなかった彼女を，Trantridge の Alec d'Urberville のもとに追いやることになるのである。

Trantridge の d'Urberville 家は，財力こそ誇ってはいたが新興の一家で，田舎の一名士として腰を据えるのに体裁の良い名として d'Urberville を名のっているにすぎなかった。Tess は Alec に本能的な不安を抱かずにはいられないが，彼の財力は Tess の家族を魅了してしまう。一家の貧困の重みは Tess の双肩にかかり，何とか援助を得なければならないのだという思いが，Tess の不安や恐れにたちまさって，彼女を後へひけなくさせてしまう。Alec の前にあっては Tess は，'I don't know ——— I wish —— how can I say yes or no when ——'[(5)] と言っているように，自己を主張することができない。家族の窮乏という現実が，Tess の心を有無を言わさず，束縛してしまう。その為，Tess はついに Alec によって，純潔を汚されてしまうのである。

数週間の後，Tess は，一人で Trantridge を抜けだして，Marlott へ帰ろうとする。そして，あとを追ってきて引留めようとする Alec を，Tess はきっぱりと，はねつけてしまう。

'I have said I will not take anything more from you, and I will not —— I cannot ! I should be your creature to going that, and I won't !'[(6)]

「私，あなたからは，もうこれ以上なにも頂かないと申しました。頂くつもりはありません———そんなことできません。そんなことを続けていたら，私，あなたの奴隷になってしまいます。私そんなつもりはありません。」

この Tess の言葉にあふれているのは，主体的な強い姿勢である。Tess は，Trantridge での，自分というものの否定された生活の末，自我に目覚めたのである。このまま Trantridge にいれば，物質的に楽な暮しのできることは明らかであり，家族への援助も受けられるに違いなかった。その反対に，Marlott へ帰れば不名誉な噂の種にされるばかりであった。それにもかかわらず，Tess は Alec のもとを去るのである。たとえ外見は安泰でも，自己というものがまるでない——即ち単なる creature としての生活に，耐え難くなったのであり，自己の尊厳の認められる，人間としての生き方をこそ，Tess は選んだのであった。

Marlott に戻った Tess は，Alec の子を病で失い，二，三年して一夏 Talbothays の農場で働くことになる。Alec に会った頃は，未だ幼かった Tess も，年月を経て本当の青春をむかえようとしており，その身の内には，抗い難い，'unexpended youth'[(7)] が，わきあがっていた。それは，Talbothays の美しい自然に受け入れられ，更には，夏という自然の生命の謳歌と相まって，再会した Angel Clare の前に，この上ない美しさ，'a visionary essence of woman —— a whole sex condensed into

one typical form'[8]「幻影のような女の精———女性というもののすべてが凝縮されてつくられた一つの典型的な姿」を，具現するのである。そこには，過去の暗い影など微塵もない。Tess は，過去を思って自制を重ねるが，自然の力には抗い難く，彼女の生命力は，ついに，Angel への強い愛となってあふれ出る。自然は，Tess の青春を育み，愛を育む。

そして，ついに，Angel との結婚という運びになる。しかしその夜，Welbridge での Tess の過去の告白により，Angel の実体が明らかにされてしまう。思いがけぬ Tess の過去に圧倒されてしまった Angel は，自分にも Tess の許しを乞うた過去のあったことなど忘れ，Tess を恋の理想化の枠からはずし，急転直下，世間の目というものの前に，引き据えてしまったのだ。そして，その世間の目を通して Tess を見た時，Angel は，'I repeat, the woman I have been loving is not you ——中略—— Another woman in your shape'[9] と言うに至るのだ。

Angel にとっては，もはや許す，許さないの問題ではなかった。それは，彼の受けた打撃が彼の Tess への愛という個人的問題でなく，世間体という，彼一人の力では動かせないものに根ざしていたからであった。

'You don't in the least understand the quality of the mishap. It would be viewed in the light of a joke by nine-tenths.'[10]

「君には，この災難の性質がすこしもわかってはいないのだ。十人のうち九人までが，物笑いの種として見ることだろう。」

この Angel の言葉に示されるように，Angel の心を占めているのは，この事態が世間に知れた時の自分の立場に対する憂慮だけだった。近代的知性を身につけ，兄弟の中でも，最も良き人道主義の理解者であり，Cambridge より田園社会にこそ真の生活があると，父に逆らってまで自主的な判断を誇っていた筈の Angel の中には，誰にも負けないほど深く，因習的な道徳観念が根をおろしていたのだった。そして彼はその因習的道徳観念を，まっこうから Tess に突き付けて，Tess のそれを越

えて生きようとしていた姿勢を打ち砕いたのだ。彼の因習的道徳観念に拠る裁断は Tess の行動を狭め，Tess から一切の自己主張を奪ってしまったのだった。だからこそ，Tess と Angel が別れて Welbridge をたつのにも，'her mood of long-suffering made his way easy for him and she herself was his best advocate.'[11]「彼女の辛抱強い気持が，彼の道を容易なものとし，彼女自身が彼の最上の弁護者」となってしまうのである。

Angel が Brazil に去った後，家からの送金の無心は，再び Tess を，貧困という力で追いつめ始める。Tess は自尊心から Angel の両親の助けを乞わず，Flintcomb-Ash の農場で働くことになるが，そこでは，機械を使っての労働が行なわれていた。

> 'the inexorable wheels continuing to spin, and the penetrating hum of the thresher to thrill to the very marrow all who were near the revolving wire cage.'[12]

> 「冷酷な車輪は廻転を続け，脱穀機のつきさすような唸り声は，ぐるぐる廻っている網籠の近くにいる人達の骨の髄までも震わせた。」

> 'By degree the freshest among them began to grow cadaverous and saucer eyed.'[13]

> 「彼等の中で最も生きの良かった者達さえ，次第に顔色が死人の様に青ざめ，目は幽霊の様になった。」

ここでは，機械は 'tyrant'[14] であり，'primum mobility'[15] であって，人間に対して 'despotic demand'[16] を続けているのだ。機械文明は既にここまで，農村社会に侵入してきていた。機械は，人間が人間の便益の為に作ったのだから，その純粋な用途のみ享受すべきなのに，いつの間にか人間が，その属性に支配されてしまっているのだ。機械が動き続ける限り，

埃にまみれようが，疲れようが，おかまいなしで働き続けなければならない——と言うより，動き続けなければならない人間。しかも，機械が動き，勝手な唸り声をあげている間，人間は話をすることもできない。まさに主客転倒であり，人間そのものが機械化されてしまっているのだ。ここの描写からは，Hardy が，機械文明の非人間性を，いち早くとらえていたことを知ることができる。

この苛酷な労働に従事する Tess の前に姿を現わした Alec d'Urberville は，再びその金銭的，物質的力で，Tess を誘惑し始める。Flintcomb-Ash で，執拗に言い寄る Alec を手袋で打った Tess が，'Now punish me ! Whip me, crush me ; you need not mind those people under the rick ! I shall not cry out. Once victim always victim —— That's the law.'(17)「さあ私を罰して下さい！私を打って下さい。粉々にして下さい。麦堆の下にいる人達のことを気にする必要はありません。私叫んだりしません。一度犠牲になったものは，いつも犠牲になる——それが掟なんです。」と言うのは，Tess が既に，Alec が逃れ難い力であると承認してしまったことを示している。主体性は失なわれ，そこには諦観があるのみだ。この Tess の窮状に決着をつけるのは，父親の死である。それは終身借地権の切れることを意味し，大農法化の進んでいた農村の実態は，その契約の更新を許す筈はなかった。しかも，Tess の過去が不身持として嫌われている為に，彼女の一家はすぐに Marlott を出て行かねばならぬ破目となる。Tess の，幼い弟妹に対する憂慮という弱味を知りぬいている Alec は，それを巧みにつき，ついに Tess を屈服させてしまう。こうして，圧倒的な物質的力で，Tess もその家族も，思い通り支配してしまう Alec は，Flintcomb-Ash で，周囲の農民の人間性などおかまいなしに動き続ける脱穀機の姿と，大差ないのである。

Brazil から帰った Angel は，Tess を探しあてるが，彼女は，もう再び来ないでくれるようにと言う。

'his original Tess had spiritually ceased to recognize the

body before him as hers ——— allowing it to drift, like a corpse upon the current, in a direction dissociated from its living will.'[18]

「彼の本来の Tess は，精神的には，今彼の目の前にあるその肉体を，自分のものとして認めることをやめて流れに浮かぶ屍のように，生きている意志とは離れた方向に漂うにまかせていた。」

いわば，Tess は，精神的仮死状態にあったのであり，ただ生きているというだけであった。しかし，Angel の去った後，彼女は突然，本来の Tess にたち返る。'O God —— I can't bear this ! —— I cannot !'[19] と叫ぶ彼女は，Trantridge で Alec のもとを断固として立ち去った時の姿と，いささかも変わるところはないのだ。Angel は Tess にとって，唯一つの生きていく力であり，Angel への愛は，Tess の生命だった。今その Angel の姿に，押えつけられていた人間性が呼び覚まされた。Alec のなすがままになっていた Tess が，自我に目覚め，本来の主体性を取り戻したのだ。Tess は，Alec を殺害して，Angel の後を追う。Hardy はこの殺人を，人間としての自我に目覚めた Tess の，全存在をかけての自己主張として描いているのだ。だからこそ，Tess は，微塵の後悔も，良心の呵責も感じない。そして，Angel と共に New Forest の奥深く，幸福な逃亡生活を送った後，Stonehenge で官憲の手に渡る時にも，悲しみも未練もないのである。

この Tess の生き方を見てくると，そこには常に，相容れない二つの要素が発見される。

'She had been made to break an accepted social law, but no law known to the environment in which she fancied herself such an anomaly.'[20]

「彼女は，容認されている社会の掟を破らされはしたが，彼女が自らを異分子と見なしているこの環境——この場合即ち，自然——

に認められている掟は，一つも破りはしなかったのだ。」

'She was ashamed of herself for her gloom of the night, based on nothing more tangible than a sense of condemnation under an arbitrary law of society which had no foundation in Nature.'[21]

「大自然の中に何の根拠も持たない気まぐれな社会の法則の下で罰せられたという感じ以外には，何の明らかな根拠もない，昨夜の陰鬱な気持を，彼女は恥じた。」

ここに顕著なように，その二つとは，'law known to the environment in which she fancied herself such an anomaly.' 対 'social law'. 'Nature' 対 'an arbitrary law of society which had no foundation in Nature' である。これらの言葉は，自然と現実社会，更に対比をはっきりさせるなら，自然と文明社会という言葉に置き換えられるだろう。"Tess of the D'Urbervilles" においては，この二つのものが，Tess の生涯にからんで，彼女の生き方を規定していると言うことができる。

III

今，自然を 'N'，文明社会に属するものを 'C' として，Tess の生涯を分類してみるなら，

○Marlott における娘時代の Tess ——N
○家の貧困の Tess への圧迫——C
○Alec の物質的援助——C
○ Tess の自我の目覚め
○Talbothays での生命の謳歌。Angel への愛——N
○Angel の道徳観念に縛られる——C
○Flintcomb-Ash での，機械による労働に従事——C
○Tess の家族，その背景の農村の貧困という重荷——C

○ Alec による金銭的，物質的支配——C
○ Tess の自我の目覚め——殺人
○ New Forest での逃亡生活——N
○ 官憲による逮捕，処刑——C

以上のように見ることができるだろう。

これを 'N' のみ，'C' のみに分けてみると，'N' 即ち自然のもとにある時，Tess は，本来の自我を持ち，自分なりの主張をし生命感に満ちている。自然に生命の基盤を求める時，彼女の生きようとする意志，人間として生きようとする姿勢は，肯定されるのである。これに反し，'C' 即ち文明社会に属するものに従えられた Tess は，生きる姿勢をくじかれ，自己主張もできず，他のなすがままに，自分をないがしろにし，ただ生きているというにすぎなくなる。

一つの存在である Tess が，こういう正反対の様相を呈するということは，Hardy が，自然と文明社会とを，相反する対立要素としてとらえていることを明らかにする。即ち，自然が，人間を生かし，広く許容するのに反して，文明社会は，人間否定に直結しやすいものであると，とらえていると言える。Hardy は，文明社会に，人間性の喪失を見ていたのである。十九世紀の急速な近代文明の発達の中で，都市の資本力によって，変貌を余儀なくされていく農村を見た時，Hardy は，文明の行きつくところ，自然は次第に損われる。人間性を許容する自然が損われることは，即ち，人間が顧みられなくなっていくこと，人間性が容認されなくなっていくことにつながるのではないかと，危惧したのである。

これは，Tess の最後に，象徴されていると言えよう。Tess は，二つの対立要素，自然と文明社会の間を，いわば行来したあげく，最後に Stonehenge で，官憲の手に渡る。この舞台を Stonehenge，石器時代の太陽信仰の礼拝所——即ち，sacrifice を捧げた所——にしたことによって，Hardy は，Tess を sacrifice として位置づけていると，言えるのではないだろうか。それは，Angel の，'I think you are lying on an altar.'[22] という言葉にも暗示されている。Tess は，貧困，因習道徳，機械文明と

いったものに，人間性を阻害されたが，それらは，文明社会という言葉に置き換えられるのであって，Tess はまさに，文明社会によって人間性を阻害された，sacrifice と言えるのである。Hardy は，自然が顧みられることなく，文明社会が発達して行くならば，Tess のような sacrifice が続くであろうことを，憂慮したのである。Tess を，文明社会によって人間性を損われた sacrifice として描くことによって，Hardy は，文明偏重に対する警鐘をならしたのだ。これは，文明のひずみをとらえていたと言うことができるであろう。

それなら，この Tess のような sacrifice を救うものは，何であったか。Hardy はここで，文明社会にあって，本来人間の救いであり，人間性のとりでたるべき筈のキリスト教——殊に教会の実態を弾劾しているのだ。

> 'Having the natural feelings of a tradesman at finding that a job he should have been called in for had been unskilfully botched by his customers among themselves, he was disposed to say no. Yet the dignity of the girl, the strange tenderness in her voice, combined to affect his nobler impulses —— or rather those that he had left in him after ten years of endeavour to graft technical belief on actual scepticism. The man and the ecclesiastic fought within him and the victory fell to the man.[23]'

> 「商売人としての自然な感情もあるので，当然自分が呼ばれて行なうべき仕事を，彼のお客達が自分達の間で不細工にやってしまったと知ると彼は，否と言いたかった。が，この娘の威厳と，その声の中の不思議な優しさが一緒になって，より高貴な衝動——というよりむしろ，現実の懐疑論の上に，技術上の信仰を接木しようとして十年の努力を払った後に，まだ残されていた衝動をゆすぶった。人間と，牧師とが，彼の内で戦い，勝利は，人間の側に落ちたのだっ

た。」

これは，Tess が自分の手で赤坊に洗礼を受けさせたことに対する，牧師の反応である。ここで，聖職とされ，当時の社会で断固たる権威を持っていた牧師を 'tradesman' と呼び，牧師と，信者との関係を，'tradesman' と 'his customers' と表現しているのは，Hardy の強い批判精神として，注目に価するであろう。更には，教会で教えを説く筈の牧師が，人間と対立する存在になってしまっていること，即ち教会が，いかに人間性と隔絶した存在になってしまったかをついている。

こういった Hardy の見解は，短篇においては，もっと直接的な批判となって表わされている。*A Tragedy of Two Ambitions* (1888) で兄の Joshua が弟にあてた手紙の，一文をあげてみよう。

> 'To succeed in the church, people must believe in you, first of all, as a gentleman, secondly as a man of means, thirdly as a scholor, fourthly as a preacher, fifthly, perhaps, as a Christian.'[24]

> 「教会において成功するには，世人が信じてくれなければならない。まず第一に紳士として，第二に財産のある人間として，第三には学者として，第四に説教者として，第五に，多分，キリスト教徒として。」

教会の聖職者でありながら，キリスト教徒としての必要性は，最下位なのだ。しかも，聖職者であるこの兄弟を，Hardy は，'your reputation and mine —— and our chance of rising together.'[25] の為に，酒飲みで放浪生活を送り，父らしいことは何一つしていないとは言え，実の父が河に溺れていくのを見殺しにする人間として描いているのだ。これ以上の非人間性の表現が，あるだろうか。また，"The Son's Veto" (1891) において母親の再婚を，相手の Sam が自分にふさわしい gentleman でないという理由だけで反対し続け，ついに母が死ぬと，その死を悼んで

立ち尽くす Sam を，怒りをこめてにらみつける Randolph。

> 'his education had by this time sufficiently ousted his humanity to keep him quite firm.'[26]

> 「彼の受けた教育は，この頃までにすでに彼の人間性をすっかり取り去ってしまい，彼はまったく，てこでも心を動かさぬ人間となっていた。」

この人間性皆無の Randolph もまた，牧師なのである。

教義化し，形骸化したキリスト教と，それを守る，人間性を失った，人間性と対立しているとも言える牧師。それが，Hardy が，当時の教会に見たものであった。今や教会は人間性の排斥されてしまったところでしかなかったのである。

唯一の人間性のとりですら失った文明社会に，文明のひずみを正すもの，Tess のような sacrifice を救うものとして，Hardy の求めたものは何であったか。それは，Flintcomb-Ash で，Tess が Alec に対して言うところの，'The religion of loving-kindness and purity'[27] であったと言うことができよう。Hardy は，この religion こそ，文明社会にあって，人間が人間らしく生きていく為のよすがだと，考えたのである。'The religion of loving-kindness and purity' というこの言葉こそ，人間愛に立脚して，人間の尊厳を訴えている Hardy の見解を集約していると言えるだろう。

"Tess of the D'Urbervilles" においては，最後に，'a spiritualized image of Tess'[28] と表現された Tess の妹，'Liza-Lu が，Angel と共に歩んでいくという描写により，主人公の Tess が，処刑されてしまうにもかかわらず，結末に救い難い暗さが残らない。しかし，これが "Jude the Obscure" に至ると，もはや，絶望感しかない。危篤に陥った Jude が水を求めても，答える声とてない。死にゆく彼の耳に響くのは，彼の死など頓着しない，否，彼の存在さえ気にかけない人々の，Christminster の

Remembrance games でのさけび声や，声援の声である。Jude はその中で，誰一人として看取る者もなく，唯，旧約聖書「ヨブ記」の自らの生誕を呪う言葉を呟きながら，死んでいくのだ。そこには，もはや一抹の救いもない。

文明社会は，ますますそのひずみを大きくし，人間性は顧みられなくなってゆくばかりだと，Hardy は察知したのであろう。その思いは，ついには，Hardy に次の如き述懐を，させるに至る。

> 'Though my life, like the lives of my contemporaries, covers a period of more material advance in the world than any of the same length can have done in the centuries, I do not find that real civilization has advanced equally. People are not more humane, so far as I can see than they were in the year of my birth. Disinterested kindness is less. The spontaneous good will that used to characterize manual workers seem to have departed.'(29)

> 「私の生涯は，私の同世代の人々の生涯のように，他の世紀のおなじ長さの年月というものが成し得る以上の物質的大進歩をとげた時代に，あてはまるけれど，私は本当の文明が等しく進歩したとは思わない。人々は，私の見る限り，私の生まれた年より人間的になってはいない。私心のない親切は，少なくなってしまった。手工職人を特色づけていた自発的な誠意は，過去のものとなってしまったようだ。」

Hardy は，十九世紀の社会の変動を，常に，的確にとらえていたと言うことができるだろう。近代文明の波の前に，Hardy は，自然と文明とが，相対する，二つの要素であることを，見抜いた。十九世紀の社会にあって，文明のひずみをとらえ，これを弾劾していることは，注目に価する。この，自然と文明の対立とは，二十世紀の現在でも，さまざまに

形を変えて，物議をかもしている事柄の，根本にある問題といえるであろう。更に Hardy はその不変の人間愛の上に立って，文明社会に人間の尊厳を主張した。これは，今，そこかしこで聞かれる，人間性復活の声と，主眼をおなじくするものではないか。

これらの観点から見るなら，Hardy には，驚くべき近代性があるのだ。十九世紀という時代を見つめ，その流れをとらえ，時代に立脚しながら，なお，その時代を越えて，現代においても，現実問題として，我々に訴え，問いかけてくるものを，Hardy は，持っているのである。この時代の先取性こそ，Hardy の文学を意義づけ，彼の作品に，時代をこえても色あせない生命を与えているのだと，言うことができよう。

〔註〕

(1) 市井三郎「ダーウィニズム」『世界の歴史 4　十九世紀のヨーロッパ』筑摩書房1961，p. 224

(2) Thomas Hardy *Tess of the D'Urbervilles* Papermac p. 60 ; London : Macmillan, 1970, p. 27

(3) Ibid., p. 27

(4) Ibid., p. 22

(5) Ibid., p. 87

(6) Ibid., p. 95

(7) Ibid., p. 120

(8) Ibid., p. 153

(9) Ibid., p. 260

(10) Ibid., p. 265

(11) Ibid., p. 287

(12) Ibid., p. 367

(13) Ibid., p. 375

(14) Ibid., p. 365

(15) Ibid., p. 365

(16) Ibid., p. 365

(17) Ibid., p. 373

(18) Ibid., p. 425
(19) Ibid., p. 427
(20) Ibid., p. 104
(21) Ibid., p. 365
(22) Ibid., p. 395
(23) Ibid., p. 116
(24) Thomas Hardy *Life's Little Ironies* Greenwood Edition of the Novels and Stories of Thomas Hardy ; London : Macmillan 1968, p. 87
(25) Ibid., p. 99
(26) Ibid., p. 51
(27) Thomas Hardy *Tess of the D'Urbervilles* Papermac p.60 ; London : Macmillan, 1970, p. 371
(28) Ibid., p. 444
(29) Florence Emily Hardy *The Life of Thomas Hardy 1840 — 1928* Papermac 130 ; London : Macmillan, 1965, pp. 405—406